

# 博物館の収蔵庫に眠る考古資料

「ほっとやまはく」

タイム⑰



時代の変化とともに博物館の役割も変わりつつありますが、現在、求められているのはこれらすべてなのかもしれません。

## 博物館の収蔵庫

博物館の持つたくさんの役割の中で、「資料の収集と保存」はとても地味です。しかし、実は博物館にとって欠くことのできない機能といえるものです。

山口博物館の幾つかの収蔵スペースにはたくさんの資料が保管されています。



山口博物館の収蔵庫の扉

通貨があり、円とドル等の交換レートが経済に大きな影響を与えています。

ところが、室町時代の日本では自国の通貨を持つていませんでした。当時、日本で使用された銭は、中国や朝鮮半島など海外から輸入されたものだったのです。同じ銅銭を使うということは、さまざまな品物の売買、つまり貿易には大変便利で、この時代の日本と東アジアとの経済的な一体性を示すものともいえるでしょう。

さて、これらの銭には表に二、四つの文字が鋳出されており、その文字から何年以降に造られたのかが分かります。1枚ずつ文字を判別した研究の結果、最も古いのは中国で紀元前14年に初めて

に保たれています。なぜ、このような温度や湿度に細心の注意を払っているのでしょうか。それは、山口県の歴史や文化を語る資料を良好な状態のまま未来へと伝えていくためなのです。

山口博物館の収蔵庫において、約3分の1のスペースを占めるのがおよそ900件の考古資料です。ほとんどが県内で出土したのですが、朝鮮半島や中国、台湾の資料も収蔵しています。この連載では、収蔵庫に大切に保存されている考古資料の中でも、読者の皆さんにぜひ、知っていただきたい品々をご紹介します。

興隆寺出土の備前焼甕と銅銭



## 興隆寺で見つかった室町時代のお金

今回は、室町時代に畿内西国の覇権を握った大内氏に関する資料をご紹介します。

山口市大内御堀にある興隆寺は、中世に大内氏の氏寺として栄えました。興隆寺は、1341年に火事で焼けてしまいましたが、49年に本堂が再建されたのをはじめとして復興が進みました。そして、1404年には大内盛見によつて盛大な法要が行われました。

それから約600年。1972年に興隆寺付近の工事中に、地下約1メートルの深さから備前焼の大甕（おおがめ）に入った多量の銅銭が出土しました。備前焼の大甕は、その形から1450〜1500年ごろに作られたと判断できます。そして、甕の中から見つかった銭



さまざまな種類の銭

この他にも山口博物館の収蔵庫にはたくさんの素晴らしい資料が保管されています。資料を紹介する機会を増やすことで、その魅力を広く伝えていきたいと思っています。

阿部来（学芸員・考古担当）

▽次回は20日です。

山口県立山口博物館  
TEL083-922-0294  
月曜休館（祝日の場合は翌日）。  
最新情報はホームページで。

